

即興型ディベート

研究報告集

Research Report of PDA Conferences

ホテルフクラシア大阪ベイ

2018年8月10日（金）



一般社団法人 パーラメンタリーディベート人財育成協会

Parliamentary Debate Personnel Development Association (PDA)

目次

【即興型ディベート研究報告集】

No.1 はじめに ～即興型英語ディベートの授業導入と指導～

大阪府立大学 中川智皓

No.2 授業にディベートを導入する3年間の試み

長野県立松本深志高等学校 青木 郁子 教諭

No.3 即興型ディベート研究報告集

京都府立嵯峨野高等学校 岡本 領子 教諭

No.4 即興型ディベート研究報告集

福井県立藤島高等学校 三仙 真也 教諭

No.5 即興型ディベート研究報告集

沖縄県立知念高等学校 平良 順子 教諭

No.6 Report of Debate Activities used in Class as an
English Language Learning Exercise

沖縄県立宜野湾高等学校 Isaac Smith 教諭

No.7 ディベート入門一歩手前

元浅野中学・高等学校／現シドニー大学大学院 河野 周 教諭

はじめに

～即興型英語ディベートの授業導入と指導～

大阪府立大学 工学研究科 中川智皓

(一般社団法人 パーラメンタリーディベート人財育成協会 (PDA) 代表理事)

毎年夏に行っておりますPDA全国高校 即興型英語ディベート合宿・大会は、今年度で5回目の開催となりました。文部科学省調査研究の一環で開催された初回から毎年参加されている高校、新規参加校、毎年、多くの交流があります。本合宿の一番のねらいは、授業のできる形式の即興型英語ディベートを生徒・教員のみなさんに実践的に学んでいただくことです。パーラメンタリーディベートは、古くから世界で行われてきている議論の訓練方法ですが、それを日本の一般的な生徒が実施できる形式に、「システム」として落とし込んだ点がここでの特長です。ルールやスピーチシートをはじめとする考案したシステムは、単に一般的なパーラメンタリーディベートを簡素化したという位置づけではなく、議論の仕組みを整理し、教育的効果を高めるためのデザインが組み込まれた仕組みです。ルールの一つ一つ、また教材の一つ一つに、なぜそのように設計したか理由があります。対話空間のメカニズムデザイン（制度設計）の観点からも、ディベート実践の分析と設計の両方の思考を持って、よりよい授業展開につなげることは重要です。本合宿でのディベートおよびジャッジ実践や他校の教員の皆様との情報交換を通して、即興型英語ディベートを実施することの本質を見定め、各校での授業につなげていただければ幸いです。

昨年度に引き続き、PDAでは、文部科学省平成30年度教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業において、即興型英語ディベートを用いた教員研修を行っています。昨年度は、神奈川県教育委員会と連携し、神奈川県教員の参加対象としていました。他府県からの問い合わせ、参加希望が多くあり、ご希望に対応できるよう、今年度は遠隔システムを用いたオンライン研修も導入しています。次期学習指導要領にも挙がる新科目案「論理・表現」では、ディベート活動も想定されることから、ますます授業において英語のディベート実践を指導できる教員が求められると考えられます。当該文科省事業では、PDA認定教育ジャッジ制度についても取り扱っています。研修にてディベートおよびジャッジ実践を6回以上行った教員は、PDA認定教育ジャッジ試験（筆記、ディベートおよびジャッジ実技試験）を受験することができます。即興型英語ディベートの手法が適切に広がり、公教育を通して社会変革につながりましたら、この上ない喜びです。

本PDA全国高校 即興型英語ディベート合宿・大会 2018および研究活動について、以下、多くのご支援、ご協力、ご助言をいただきました。関係各位に心より感謝申し上げます。

公益財団法人 日本財団、文部科学省、大阪府立大学、JST未来社会創造事業：「知」の循環と拡張を加速する対話空間のメカニズムデザイン ほか

※ここでは、パーラメンタリーディベートを通常授業（50分）に導入できる形式にアレンジしたものを、なじみやすい・理解しやすい表現として、即興型英語ディベートと呼んでいます。

授業にディベートを導入する3年間の試み

青木 郁子

長野県立松本深志高等学校

(1)はじめに

本校では毎年1学年のTTの授業でディベートを授業で導入しています。様々な出来事を深く考え、意見を述べたいという生徒が多いので、通常の授業に取り入れたいと考えていました。この授業をきっかけに時事問題やディベートにさらに生徒の関心が向けられればよいと考えています。

(2)実践内容

1年次 授業の手順

1. クラス40人を6人または4人のグループに分け、それぞれのグループに1つのテーマを与え、ブレインストーミングをさせ、AD、DAを考えさせる。
2. グループの中で肯定・否定のチームに分かれ、話す順番を決めてスピーチを準備する。
3. グループごとに皆の前で違う論題でディベートをし、他の生徒が肯定・否定のどちらが説得力があったか、ジャッジをする。

スピーチ時間は1人1分。中川先生のフォーマットのスピーチシートを使用。

生徒全員にリスニングシートを配布。ディベートのスピーチの内容のメモを記録させる。

リスニングシートには勝敗や理由も記入させる。教員は別にスピーチをジャッジする。

2年次 教科書に出てきた題材を元にディベート

3年次 入試問題に出てくる論題で即興型ディベート

Motions: (1年次)

1. High schools should abolish uniforms.
2. Giri choco should be banned.
3. People should read the book before they watch the movie.
4. Cell phones should not be allowed at school.
5. Electronic dictionaries should be banned from use in schools.
6. Students should join a sports club rather than a cultural club.
7. High schools should abolish homework.



3年次 授業風景

(3)まとめ

生徒の感想は、「様々な意見が聞けてよかった」「楽しかった」とディベートに関して前向きな意見が多いのですが、ディベートのやり方を教えるような授業であり、即興型の形をとった準備型ディベートであるので、この後、即興型のやり方につなげていけるとよいと考えています。

即興型ディベート研究報告集

岡本 領子

京都府立嵯峨野高等学校

(1) はじめに

本校は1学年8クラス320名の規模の公立高校。SGHの研究指定は今年5年目、SSH研究指定は2期2年目を迎える。このため授業の研究開発には前向きな同僚に恵まれている一方で、進学実績も求められる公立高校なので、常にその両立に悩まされている。英語に関しては大学入試改革の行方が本校の英語教育の舵取りに大きく影響している。

(2) 実践内容

導入科目：第2学年 英語表現

取組形態：月に約1回各クラスごとに2年生全クラスで実施

内容

①校内でディベート授業経験のある教員が公開授業実施。英語科教員全員が参観

②京都府教育センターが主催した教員向け研修に本校英語科の教員が参加

③1時間目 英語表現授業にて導入授業

即興型英語ディベートのルールの説明

日本語による実践（ルールの理解確認・論理の組立確認）

④2時間目以降 各クラス英語表現の授業内で英語によるディベート実践

（時節・トピカルな話題にできるだけ関連付けて論題を選択・PDA 学校会員になっており、その単語シートを活用）

⑤校外の大会については1学年・2学年対象に英語科全体で案内し、希望者にはディベート同好会の生徒が事前の講習を行なう。（昨年度大会に参加した生徒が自主的に同好会を立ち上げた。）

⑥海外の高校から訪問を受ける際の交流授業にも積極的にディベートを取り入れている。



(3) まとめ

ディベートで交流している様子↑

開発した導入授業のパッケージと2回目以降の授業のパッケージを英語科教員間で共有し、各クラスが教科書を使用した従来型の授業と両立できるように、実施する授業時間は固定せず、各クラスの担当者が実施時間を設定している。そのことが、ディベートに取り組みやすくしており、継続した取り組みを可能にしている。成績評価にはこの取り組みを反映させていないが生徒は積極的に参加する。

即興型ディベート研究報告集

三仙 真也

福井県立藤島高校

(1) はじめに

我々英語教師にとって忘れてはならないのは、授業を「活動しているだけ」の状態にしてはならないということだ。授業でしかできないこと（たとえば生徒同士の考えの深め合い）に注力し、題材や言語そのものに興味を抱かせ、最終的には生徒を自律した学習者に導くことが我々の責務である。一般的に即興型ディベートは活動や形式そのものに関心が行きがちであるが、ディスカッションの一途として即興型ディベートを授業内に組み入れることで、生徒はより深く考え、内容をアウトプットするようになると思う。広範なテーマに関しての予備知識が要求され、また深い議論を「自分から」求めていく姿勢が身につくことも、この形式の大きなメリットである。

実践内容 対象学年 2年生（理系）1クラス 使用教科書 CROWN II（三省堂）

即興型ディベートは英語表現で実施されることが多いが、英語で実施することで、教科書を自然なインプット（またはオフィシャルエビデンス）として用いることができ、能動的な読み・振り返りを行うきっかけとなる。本時ではレッスンの概略（成人年齢と投票に関する題材）をつかんだのち、Motion（Adulthood age in Japan should be lowered to 18.）を発表、15分後にディベートを開始した。試合中のフローシートをもとにエッセイライティングを行ったが、その際注意したのはライティングにおける評価規準を事前に示すことであった。ディベートを踏まえて書くことで「反対の立場を示す」「比較し、優劣をつける際にその価値基準を明確にして述べる」ことを目標にした。



結果として双方の意見を要約し、与えられた価値基準を参考にしながら、論理立てて意見を述べることができる生徒が多く見られた。15分のライティングで400語近い語数を書く生徒も複数いた。後に対象クラスで行ったGTEC for studentsの成績では平均650、ライティングスコア等でも最高値を記録するなど、英語力の向上が見られた。また後日行った思考力の伸びを判断する外部試験（GPS）においても対象クラスは非常に大きな伸びを示した。即興型ディベート導入と英語・思考力の伸びがほぼ並行して起こっていることから、その相関性は強い。

(2) まとめ

即興型ディベートの最も優れた点は、諸分野に対して精通する必要があり、社会問題に対する意識喚起につなげつつ、「深い」議論を言おうとスピーカー（生徒）が自分から分析を試みる点にある。授業内でのフォーマットは簡便で取り入れやすい。上記に示したように、授業での実施を通じて生徒へのスピーキングのみならずライティングや思考力への波及効果も大きい。我々教員は授業を通じて生徒に即興的に話すというきっかけを与え、その姿勢を養うことで、授業外でも生徒が自律した学習者として、積極的に行動することにつながることを忘れてはならない。

即興型ディベート研究報告集

平良 順子

沖縄県立知念高等学校

(1) はじめに

①授業でPDAを取り組もうと思ったきっかけ

沖縄県では、まだ即興型英語ディベートは、準備型ディベート部に比べるとそれほど普及していない。H27年夏に初めてこの合宿・大会に参加して、かなりの衝撃と刺激を受けた。自分自身、思った以上に意見をまとめて話す事ができなかったが、PDAが生徒の英語力向上に大きな役割を果たすのではないかと自信めいたものを感じた。ここでは、私が試行錯誤しながらも授業や講座などで取り組んだことを発表したい。

(2) 実践内容(時系列)

①H27年 秋 初めて3年生の授業で取り入れる。ジャッジはなし、2人のスピーカーで3対3でディベートを行う。フォームは、簡易版を作成して使用。Motionは、「Basketball is better than baseball」、「Money is more important than love」。生徒の反応は、私の予想を超えるほど盛り上がった。しかし、英語力が十分でなく、時折日本語が混ざっていた。

②H28年 4月～ 本格的に1年生の授業で取り組む。定期テスト後に必ずディベートの時間を取った。1チーム3人（スピーカー2人、ジャッジ1人）で行う。生徒たちは、アイデアが浮かばないことや話したいことをうまく英文にまとめるのに苦労していた。ただ、普段の教科書使った授業とは、違う表情が見えたり、自分と違う意見に感心したりとPDAを楽しんでいる様子が伺えた。

③H29年 冬 授業以外でも放課後にディベート講座を開設し、興味を持った生徒を中心に取り組んだ。この時期から夏の全国大会出場を視野に入れる。少しずつ生徒の成長が見えてきた。

④H30年 4月 授業+講座でPDAに取り組む。全国大会に出る生徒を選出。集中して放課後で練習を積み、PDA全国大会へ沖縄県勢初出場を目指す。フォームも簡易版から中川先生のフォームを使用し、少しずつレベルを上げていく。Motionは、「Living in the countryside is better than living in the city.」、「The government should abolish death penalty.」や「The government introduce fat tax.」などで取り組む。

(3) まとめ

①**成果** 「授業で取り入れたい。沖縄県へ普及させたい」という思いから授業などで実践導入してきた。これまでの活動の中で、生徒たちの成長が見れたことが1番の収穫である。それと同時に自分も成長させてもらったと実感する。

②**課題** ・PDAを授業で取り入れるには、ある程度の英語力が必要。（英検3級以上）
・意見をまとめるための英作文の指導。

③**今後の予定** 県内でもPDAを取り入れる高校が増え、来月9/1,2に中川先生、PDAスタッフの協力を得て、沖縄県でPDA交流大会を企画している。県内から既に6校参加希望が出ている。

Report of Debate Activities used in Class as an English Language Learning Exercise

Isaac Smith

沖縄県立宜野湾高等学校

Over the last few months, at Ginowan High School, we in the English department have been using debating and debating skills and techniques in class as a method to reinforce students English language ability. Primarily this has been done in elective English classes that are given once a week as a supplement to the students' usual English lessons.

Primarily we have focused on the Parliamentary debate style where students are given a topic before the debate, have limited time to prepare and then must present their arguments in groups of three, each representing different members of an imaginary parliamentary group.

The students' are supported with bilingual vocabulary lists pertaining to the topic, argument structure guides which provide students with the templates for arguments so that students can focus on the content and teacher guidance during the planning stages. The groups of students should also work together to combine their ideas on the motion and support each other.

The advantages of this activity are that students are given an opportunity to apply their language skills within a fairly real-world context, debate topics can be tailored to students' interests and ability level and, once the debate structure has been learnt, the focus of the activity is purely on understanding content and using rhetorical devices. Through using this activity we have seen students gain confidence in their English ability and also the beginnings of a sense of ownership of the English language. Their increasing familiarity with rhetorical devices and argumentative structure seems to have shifted their view of English as a barrier that they must overcome closer towards English as a tool that they can use to achieve what they want.

ディベート入門一歩手前

河野 周 (かわの あまね)

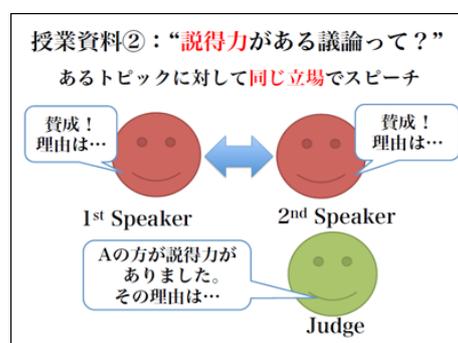
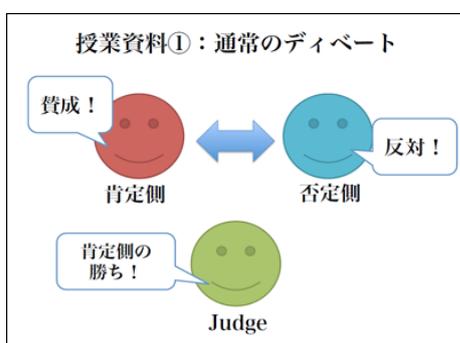
元浅野中学・高等学校／現シドニー大学大学院

(1) はじめに

論理的に英語を話す力を鍛える方法としては、学習指導要領でも推奨されているように、授業内でディベートを行うことが挙げられています。しかしその一方で、ディベートをやるためには、生徒の力がまだ足りないといった声や、ディベートを授業でやったとしても、ただ勝ち負けだけにこだわって終わってしまうという声がよく聞かれます。そこで、論理的な英語力を話す力を鍛えるために、ディベートの土台となる活動・ディベートをより活かすための活動を行いました(2017年3月)。その方法は、ディベートのように賛成側・反対側に分かれて議論を闘わせるのではなく、同じ立ち立場でスピーチを行い、どちらのスピーチの方が説得力があったかを比較するというものです。

(2) 実践内容

①**役割決め**: 3人一組のグループを作ります。そこで、一人目のスピーカー・二人目のスピーカー・ジャッジの3つの役割分担を決めます。②**スピーチの準備**: 役割が決まったら、トピックを提示し、準備を始めます。準備時間の目安は1~2分になります。ここで重要なことは、ディベートとは異なり、賛成側・反対側に分かれるのではなく、各スピーカーが同じ立場でスピーチを考えるようにします。例えば、トピックが「タバコを廃止すべきだ」とした場合、二人のスピーカーが同じ立場(タバコは廃止すべきだ)で、スピーチを考えさせます。③**一人目のスピーチ**: 準備時間が過ぎたら、すぐにスピーチを始めさせます。一人目のスピーカーの難しいところは、あまり準備時間がないことです。そうすることで、即興力を鍛えることを意識しました。④**二人目のスピーチ**: 続いて二人目のスピーカーがスピーチを行います。ここで大事なのは、一人目のスピーカーが使用したアイデアや表現とは出来るだけ異なるものでスピーチをさせることです。こうすることで、一人目のスピーカーと同じく、即興力を養うことを目指しました。⑤**ジャッジのコメント**: 二人のスピーチが終わったら、ジャッジはどちらのスピーチの方が説得力があったのかを考え、その理由を述べます。ここでのポイントは、どのようなスピーチが説得力を持っているのかを考えさせるということです。実際のディベートの場合は、そもそも賛成側と反対側の考えが異なるので比較が難しいのですが、同じ立場であると比較がしやすくなるので、それを利用して、より良いスピーチとは何かを考えさせました。⑥**次のラウンドへ**: この一連の流れが終わったら、それぞれの役割を交代します。3セット行うことで、生徒は全ての役割を経験できることになります。そしてこれにより、生徒自身が自らのスピーチを客観的に評価できることを目指しました。



(3) まとめ

この方法は「ディベートをやるには、まだまだ力が足りないといった生徒」を指導する際の一つの手段になるかと思います。ディベートの試合だけでなく、試合を行うための土台となる様々な活動を模索していくことが今後より重要になってくると考えます。

即興型ディベート研究報告集 PDA18-1

発行日 2018年8月10日

発行所 一般社団法人 パーラメンタリーディベート人財育成協会

大阪府堺市中央区学園町1-1 大阪府立大学 工学研究科 機械工学分野 中川研究室内